

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	36 / 2015 / 14 - 30 (再編集版)
タイトル	青高校舎 流転物語 ～平成26年度 総会の講演から～
著 者 名	室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

青高校舎 流転物語 ～平成26年度 総会の講演から～

第10代 室谷 洋司

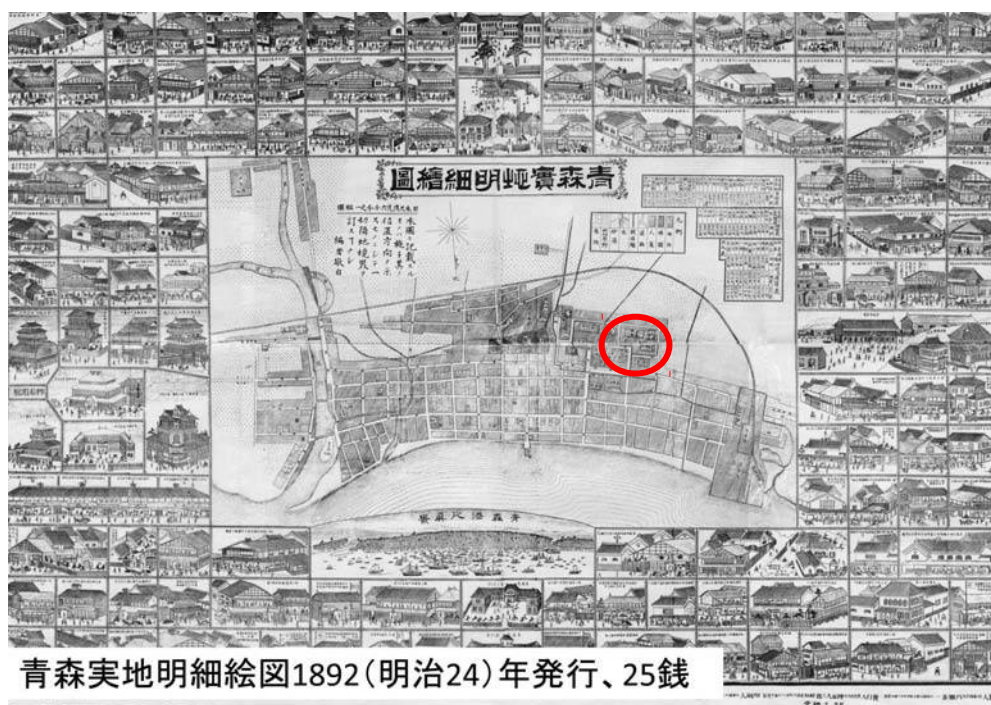
「新町校舎」がはじまり～明治33(1900)年

今年は、母校の青森高校は114周年になります。その起点は前身の「青森県第三中学校」が明治33(1900)年に現在の「青い森公園」のところに創立されました(写真1)。実はこれより16年前の明治17年に県内初の「青森県中学校」が設立されていましたが、明治22年に市町村制が施行され青森の人口が少ないということで弘前に移転されてしまいました。これでは駄目だ、公立の中学校が青森に欲しいという官民あげての運動が実り、ようやく第三中学校として当初の校舎を増築して設置、弘前は第一中学校、八戸が第二、ほかに木造中学校などができました。青森の三中の場所は、新町(住所は大野字長島)だったことから「新町校舎」と呼ばれています。



写真1 新町校舎 1900(明33)年4月1日～

この新町周辺は、青森の政治・行政とか教育などの中心地でした。当時の位置関係が詳細にわたって記されている「青森実地明細絵図」を掲げました(図1)。これは大変な地図です。中央に市街地を載せ、周囲には代表的な建造物を約200枚のイラストで示しています。精密な印刷で超アップして三つほど紹介します。青森県庁(図2)、青森裁判所(図3)、青森高等小学校(図4)などです。残念ながら青森県第三中学校は載っていません。いずれも洋風の味のある建物です。



青森実地明細絵図1892(明治24)年発行、25銭

図1 当時の青森市内を精緻に伝える明細絵図(明24)。赤い○部分が図5

「新町校舎」の周辺を見てみましょう。地図を超アップしたのが図5です。上部の太い青線が今の国道4・7号線、縦線が八甲通りと柳町通りです。赤い線の東西線は上が新町通り、下が安方通り、縦が県庁通り。赤い丸で囲んだ所に中学



図2 青森県庁のイラスト



図3 青森裁判所のイラスト



図4 青森高等小学校のイラスト

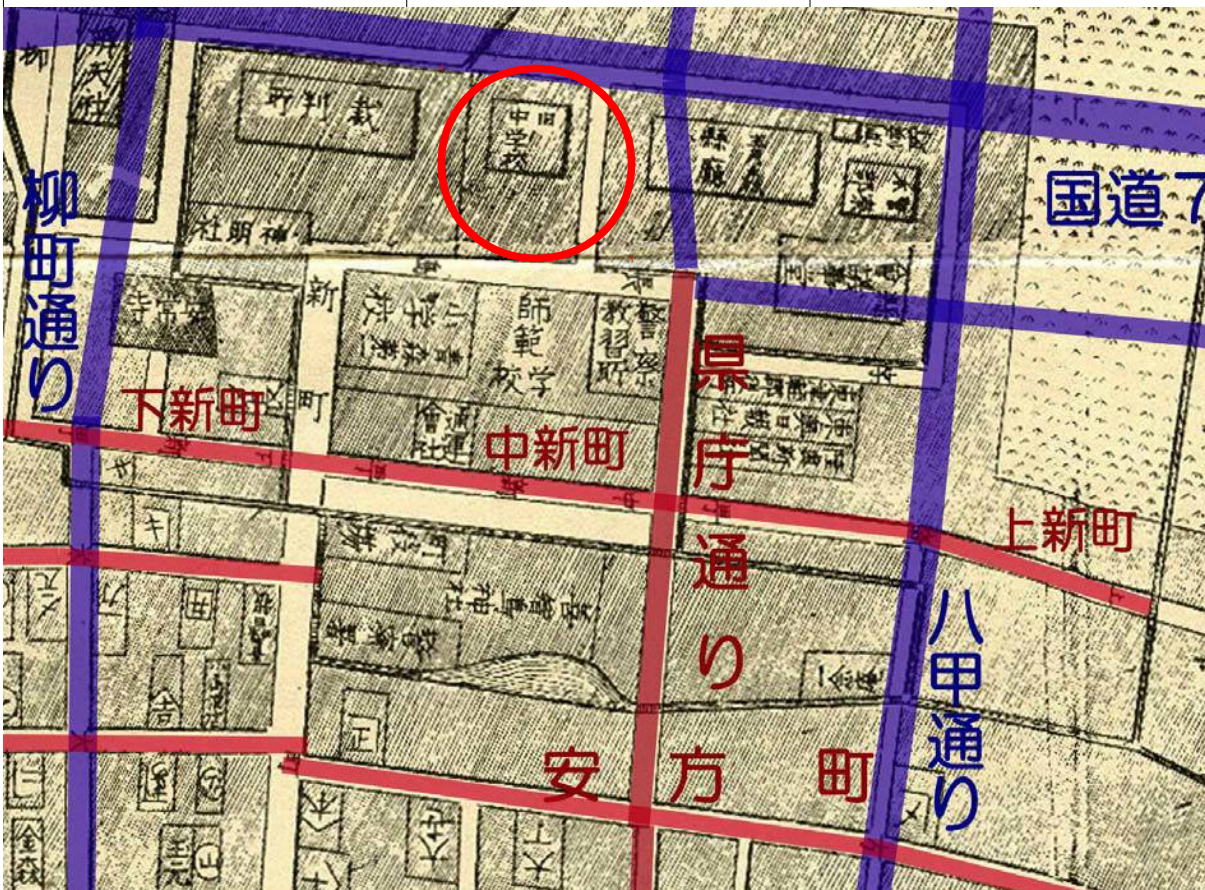


図5 明細絵図(図1)の部分拡大。赤円で囲んだところが「新町校舎」

と記され、ここが「新町校舎」です。県庁の東隣で裁判所と並んでいます。海手(下)には東から青森第一小学校、師範学校、警察教習所、東津軽郡役所、東奥日報社、陸奥新聞社の文字が並び、さらに下方には町役場と警察署が善智鳥神社の境内に食い込むかたちであります。

合浦への移転は明治45(1912)年～「白壁の校舎」

「新町校舎」から12年後の明治45年に合浦に移転(住所は造道字浪打)、「白壁の校舎」(写真5)です。校名は移転前に「県立青森中学校」と改称。この間、高度な女子教育の場として「県立第三高等女学校」も設置、(のち「青森高等女学校」に改称、愛称「唐松校舎」、写真6)、場所は浦町字野脇です。この時期の青森県の教育機関について吉田初三郎の筆による鳥瞰図をご覧ください。ときは昭和7年、明治、大正を経て世は平穩に推移し、青森市の最も充実した町並が描かれています。

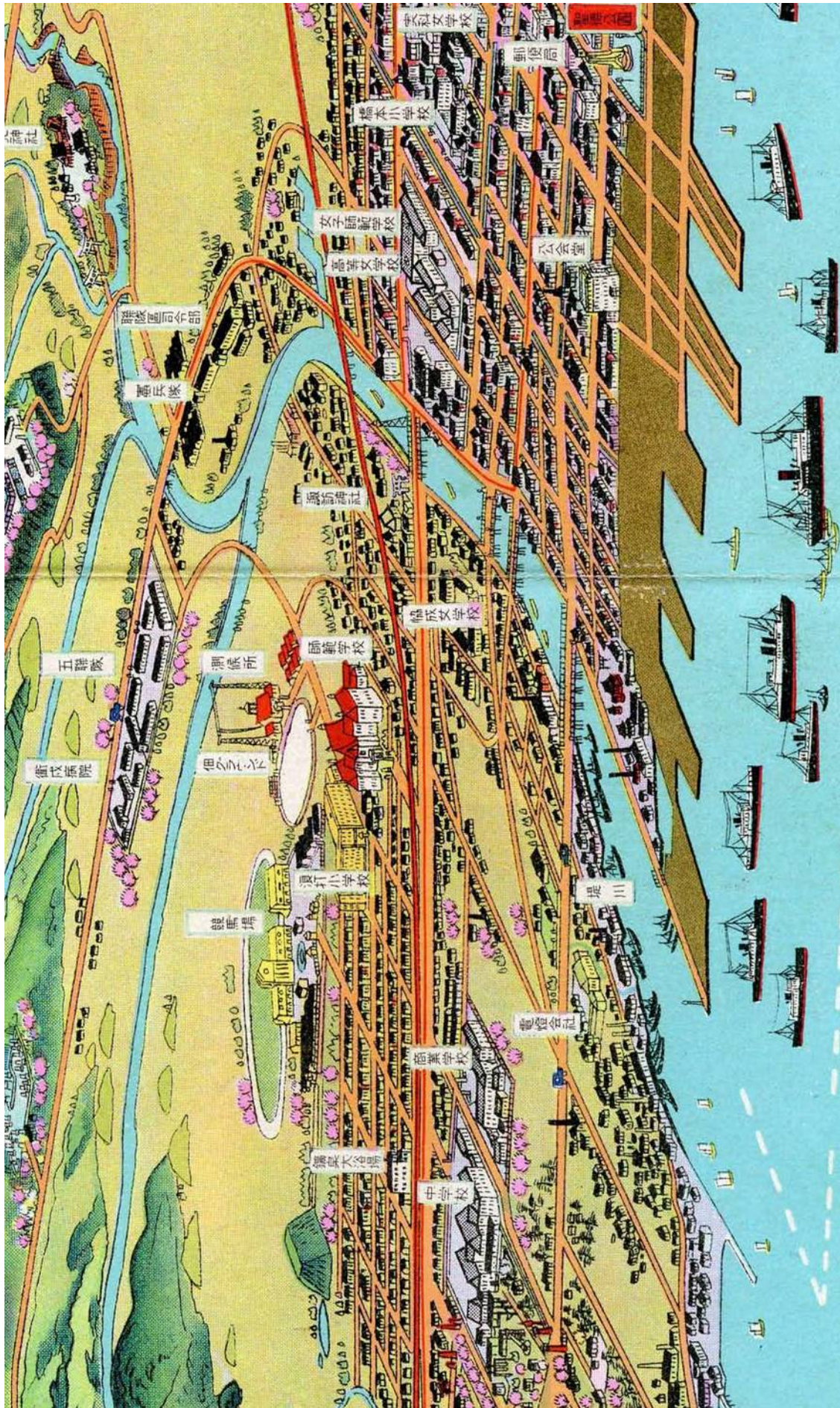


図6 吉田初三郎の青森市鳥瞰図（昭7、1932）の部分。教育関係の建物は左から青中、商業学校、浪打小、師範学校、協成女学校、高等女学校、女子師範学校、ほかが見える

青森大空襲
昭和二〇年七月二八日

青森湾、青森港では
7月14日、8月9・
10日にも爆撃



写真2 青森市を爆撃したB29。
83,068発の黄燐焼夷弾を投下
したと言われる



写真3(右) 青森栈橋を攻撃。後方
は青森市街(8月10日)。「空襲の
記録」(2002)から



写真4 公会堂から南西(浜町・大町)方向。余燼がくすぶる市街地は見るに忍びない。(7月29日頃)



写真7 青森空襲・戦災地図。市街地の88%とも90%とも言われる。(「青森空襲を記録する会」提供)

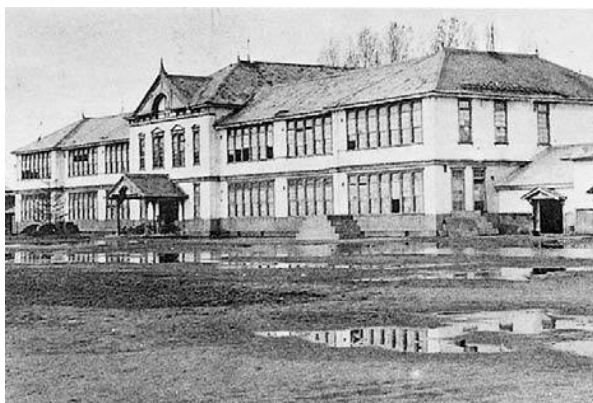


写真5 県立青森中学校の校舎「白堊の校舎」



写真6 県立青森高等女学校の校舎「落葉松校舎」

鳥瞰図(p16)には、今の青森市文化会館があるところには高等女学校が、その右(西側)に女子師範学校が見えます。真下(北側)には建築に粋をこらした公会堂があります。左(東)へ堤川をわたると、今の国道4号線の海側に協成女学校(私立)、少し離れて商業学校、中学校が偉容を誇っています。当時は堤川から東は人家が少なく、思うだけの用地が確保できたようです。

国道から山手に目を転ずると教員養成の師範学校が大きな存在感を示しています。このカラー写真は見たことがありません。屋根は赤色系であったのでしょうか。すぐ隣には浪打小学校が堅固な姿を見せています。これはやがて青森を灰燼と化した大空襲からも生き残った数少ない建物とされています。「白堊の校舎」は明治45(1912)年、「落葉松校舎」は明治40年から、それぞれ高い志をもった男子、女子の高等教育の学びの園でした。

さて本稿、「校舎流転物語」。結論から言えば戦争という未曾有の不幸から学び舎が壊滅、その後どのようによみがえり変遷をたどったのか……。概略を示せば次のようです(写真7)。



写真7 青高114年間の校舎変遷の流れ

青森大空襲～昭和20(1945)年7月28日

大空襲は昭和20年7月28日夜10時37分から71分間にわたり、市街地の殆どが壊滅。米軍の報告書には88%(90%説も)。(p17参照)

そして死者・行方不明者は745人、重傷者282人、建物被害2万9589戸(非住家含む)とされています(県知事報告)。……これは青森市の、未来永劫、忘れじの大悲劇です。

証言1 昭和20年7月28日 空襲焼失

- 校長の自分は、なすすべなく校庭の片隅で同僚や何人かの生徒諸君と大校舎が炎々として燃えていったのを早晩まで見守っていた。胸中は、これを表す言葉を知らない。(横山武夫、七十年史)
- 重要書類は三中全会館書庫、理科機器類は久栗坂国民学校に疎開していた。(百年史)
- 明けて、市内遺体処理。市立一中と、ほどなくもう一か所へ……。

青中・青高女、灰燼に～流転のはじまり

当時、青中の校長は横山武夫氏でした。同氏はのちに県副知事などの要職についた方で、歌人としても著名です。文章を操る達人に青中消失について、「胸中は、これを表す言葉を知らない」と言わせ、「証言1」のように話しています。

今の青森市文化会館のところにあった青高女の場合も、まったく同じ状況で「証言5」(p23)のような悲惨さです。そして両校とも学び舎は下の図8のように転々と移っていくことになります。住むところも食べるものもないなかで、学校の関係者は生徒たちに教える場所を懸命に探し求めていきました。。

結果として、空襲を免れた市内の学校のうち造道・浪打小学校(国民学校)、市立一中(旧制)、松原・野脇中学校、山田高校などが、それに「松森校舎」。二部授業、三部授業は当たり前でした。

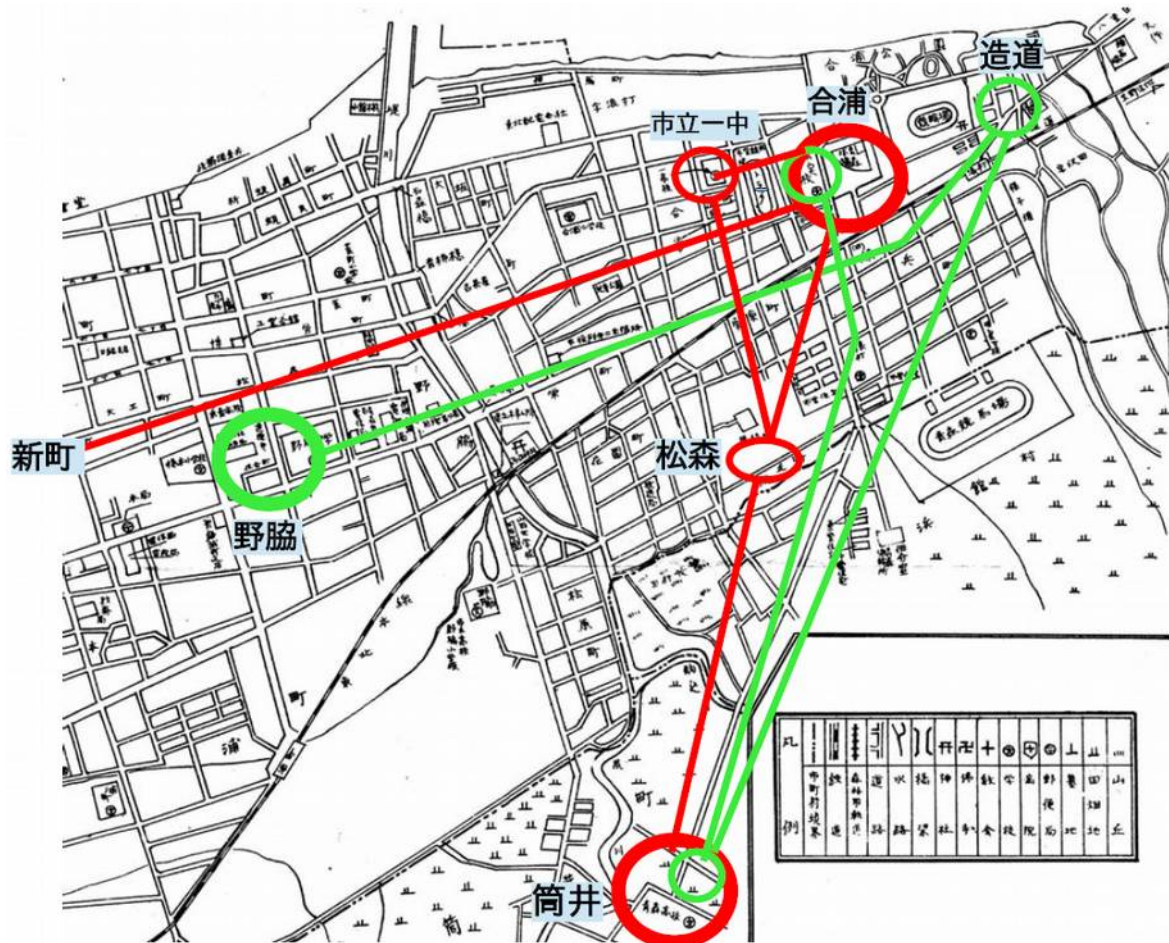


図8 昭29年の市街図(着倉、1976)に赤線で青中、緑線で青高女の移転の足跡を示す

私は「やぶなべ会」10代(青高統合8回生)で、空襲のときは5歳、郊外の農村に住んでいました。こども心に町の方の空が真っ赤になっていたこと、疎開者が10家族ほど居て、その子供たちとワイワイ、ガヤガヤ遊んだことを思い出します。青高入学は「七棟校舎」です。今日はここに「兵舎校舎」で学んだ方、空襲体験者もいらっしやいます。どうぞ、生の話を差し挟んでください。

「松森校舎」は何処？

青中の上級生は焼け残った一中、下級生は松森にあった2階建ての長屋風の建物、それは海軍要員宿舎(正式名は大湊海軍施設部工員宿舎)だ、などと横山校長や関係者が「証言2」のように語っています。

「松森校舎」が現在の住宅地図でどこに位置するのか確定されていません。「青高百年史」(2003)を編纂するとき、ここで学んだ8人の方々が記憶をたどりながら解明を試みていますが、今の甲田橋通りの5差路から、東に約150～160メートルの「マンション甲田」と「マンション如水」の辺りと見て間違いない、としています。

青高114年の歴史のなかで最も不便を強いられ、しかし学生たちは自由と希望に燃えたこの学び舎。それがほんのひと時であっても重要で、キッチンとさせる必要があります。引き続き調べて見ようと思います。五十嵐さん(3代)は確か、ここで学んでいますね。

五十嵐(正俊) そうです。合浦の白聖の校舎は入学式の時入っただけですぐ転学、復学後の授業はこの松森校舎です。海軍関係の宿舎だったので畳敷き、それを取り払ったので床板は粗末なザラ板です。二つぐらいの部屋の仕切を取り払い教室のスペースを確保したという感じです。そこに胡座をかいて、もちろん机はないので野外写生するときの写生板を肩からかけて授業を受けると言った感じです。家に帰れば焼けトタンで造ったバラック。予習・復習できません。教科書もないんです。ここで一冬を過ごしました。一時、一中に間借りし、春になって五連隊の兵舎を使った校舎に移りました。



写真8 真ん中の楕円形の赤い線で囲んだ辺りに「松森校舎」があった。右上は消失した師範学校跡地で市営住宅が。昭23年の米軍空撮で2階建ての長屋風建造物は、まだ残されていると考えられる。緑○は屠殺場

証言2 9月13日～ 松森校舎

- 上級生は焼け残った一中、下級生は松森町にあった2階建て長屋風の建物。床板にアクラ、真面目に授業。弘中の代表がたくさんの書物を持参。(横山武夫、七十年史)
- 花園町の海軍要員宿舎。学校施設はゼロで大湊要港部解散で不要の謄写板、用紙類を買いにいった。(上田武夫、19回卒、同上)
- 私はこの一室で自炊、当直のような恰好。1階の隅っこの部屋で何でも入れて料理を作った。その匂いが授業中の2階まで上がってきた。(下山義明、教員、「無限の青春」)
- 隣に屠殺場があったので、ここ(松森校舎)を「ブタ小屋、ブタ小屋」と呼んでいた。(取材)
- 甲田橋を西から東へ渡って約500m、海軍施設部工員宿舎でこれを改装、普通教室12、校長兼事務室、職員室とした。(百年史)

室 谷 この松森校舎があった周辺を航空写真(写真8)で示しました。赤い楕円形で囲んだ辺りに相当します。「証言2」には、隣に屠殺場があったとしていますね。

扇 野 屠殺場ですが、現在の、南栄町保育園の辺りです。

室 谷 校舎は8丁間前後の部屋を二つ通して教室とし、これが甲田橋通り

に沿って東西に3～4教室、1階が2列、さらに2階にも同じようにあつて合計12室、これに職員室とか校長兼事務室、教員住宅(家族1、単身1)、炊事場、便所などがあつたと言われます。粗末な造りでも相当の存在感があつたものと思われま

証言3 ハーディング氏の提案

- 校長室は2階の東側、3畳間くらい。公会堂にいた担当官ハーディング氏が視察にきた。幾本かの薪を見て、「これは何の木？彫刻に良さそうだ」。親しみやすく教育者タイプ。(横山武夫、七十年史)
- 彼の帰国間近のとき、「近くワイルドキャット部隊(当時、旧五連隊兵舎に滞在)が帰国して、そこが空く。青中校舎をそこに移したらどうか。あなたが県の上司に言ってOKなら私は札幌の米司令部に献策する」。(同上)
- 資金難、物資不足、紆余曲折、そしてここに決まった。
- 一時、近くの田村牧場も候補地にあがつたという。(着倉弥八、町内盛衰記)



写真9 米進駐軍司令部になった公会堂。以後7年間にわたって軍政が行われた

「五連隊兵舎校舎」へ～昭和21(1946)年6月

青高といえば筒井でしょう！と当たり前のように思っていますが、ここにくるキッカケに一人の軍人というより文人タイプの素養をもったアメリカ人の配慮がありました。「証言3」のハーディング氏の提案です。ときの横山校長とハーディング氏の会話から、紆余曲折があつたと思いますが切迫した状況の中で何か人と人のつながり感じられ、最良の選択だったと思われま

写真10が昭和23年当時の「五連隊兵舎校舎」を中心とした筒井地区の空撮で、米軍が戦後の状況把握として撮影したものです。あとで述べますが、この時点では青中、商業学校がここに入り、青高女は造道小学校に居たので、まだ来ていません。校庭などは大分、荒れているように見受けられます。すぐ西側にある荒川には曲がりくねった、三日月湖の形跡もありますね。

徳 差 それ三日月湖ですが、今の(地理学の)呼び方ではそう言うのでしょうか。我々こどもの頃はここで遊びましたがそうは言いませんでした。荒川を改修して残ったところがこのようにジメジメした湿地になって水溜まりなどができていました。ここでよく遊びました。

五十嵐(正俊) 空撮の五連隊の右下に見えるのは衛戍病院です。昭和20年4月に、青中に入学してすぐ新潟の養成所に転学？しましたが、行く前に身体検査で入ったことがあります。

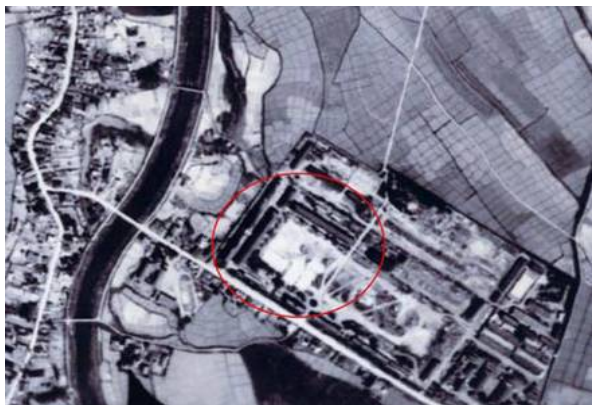


写真10 赤い○で囲んだのが「五連隊の兵舎校舎」(昭23年、米軍撮影)



写真11 「五連隊兵舎校舎」

合浦から松森へ。松森は通称で実際は花園町になります。そしてようやく筒井の五連隊兵舎に落ち着きました。ここは米軍の進駐軍の一部1,000名が入ったところ(青森市内は10か所で計2,140名。県内全体では合計15,337名)。軍靴そのまま歩き回るとか、集会所でダンスパーティーを出来るようにしたとか荒れ放題でした。「証言4」として、文献引用とか取材でまとめておきました。

写真12～14は兵舎校舎の内部を知ることができる貴重な写真です。この時点ではまだ青中です。「無限の徽章は中字形」の校旗を掲げて横山校長が訓辞をしている場面ようです。たった1枚の写真ですが多くのことがらを物語ってくれます。

下の写真13は細部を切り取ったアップです。教卓の上には盆にミカンなどを盛っています。壁板には綱領が貼っています。季節は冬、ストーブを燃やし、隅の棚には生徒たちの長靴がズラリ置かれています。

昭和21年暮れ、青中が五連隊兵舎に入るのを見届けて横山校長は退任することになります。

翌年4月1日に小出義雄氏が校長として着任。その後、学制改革で新制高校が誕生します。戦後の慌ただしい経過などを整理して見ると、

昭和20年5月3日 横山武夫が青中第12代校長。7月28日、青森大空襲で松森校舎、市立一中で分散授業

21年6月、五連隊兵舎に移転開始、12月26日完了。直前の同月6日に横山校長退職

22年3月 学校教育法公布。4月1日 小出義雄が第13代校長(青中)

23年4月 1年間の準備期間の後、新制の「県立青森高等学校」、小出義雄が初代校長。青高女は「県立青森女子高等学校」にそれぞれ移行

25年1月31日 今井孝が第2代(統合初代)校長。同年4月、青森高校と青森女子高校の両校が統合して「県立青森高等学校」が誕生

写真14は、新制高校の初代校長になった小出義雄氏が兵舎校舎で訓話する貴重な写真です。

証言4 五連隊兵舎 昭21年6月～

- 兵舎は堅固無比、長い間染みついた保皮油やワセリン、消毒薬の匂い。太い柱に遮られ暗い教室。何から何まで窮乏生活。沈滞した空気を高めたい、横山校長の許しでテニス・コートを作った。(上田武夫、七十年史)
- (一部生徒?)最初に入ったのは広大な敷地の北側にあったバラックに。周囲は高い有刺鉄線、兵舎か?そして兵舎に移った。(七十年史)
- (C棟)のトイレは洋式に改造されていた。D棟とE棟の間にはダンスパーティーにも使ったような集会所が増築、グリーンのリノリュームを敷いていた。(取材)
- 青中生と青高女生が総出で床の泥洗いなどをした。軍靴のままだったので汚れがひどかった。(取材)



写真12 横山校長の訓話。兵舎校舎(昭21年頃)



写真13 同上の部分拡大。当時の状況が見える



写真14 小出校長の訓話(昭22年頃)

青高女校舎は造道小、そして転々と……

本誌前号(35号)に「岩崎ミエ先生訪問記」と題して書きましたが、終戦前後のさまざまなエピソードを紹介しました。そのなかから、年表部分を再録(一部補足)しておきます。

昭和20(1945)年7月28日 青高女「落葉松校舎」全焼 → 造道小学校へ

21年7月 筒井の旧五連隊へ

22年9月5日 火災で全焼。野脇中・山田高・浪打小学校で分散授業

23年4月1日 学制改革で「県立青森女子高等学校」に。浪打校舎(ライラック校舎)完成

25年3月10日 創立42周年記念式典。直後に統合

証言5 青高女の場合

□ 空襲で母校焼失。造道小学校を借りたり、旧五連隊兵舎に移って類焼。野脇中、山田高校、浪打小に分かれて授業したり。いよいよ新校舎が浪打の商業学校の跡地と決まり……。 (藤田美栄、18回卒、「無限の青春」)

□ 新校舎ができるまで、山田高校や松原中にお世話になっていた。 (田辺良子、同上)

□ 5月、浪打に新校舎完成で移転した。ライラック色で二重窓、当時としては素敵な建物でした。 (岩崎ミエ、教員、同上)



写真15 昭23年に完成の青高女「ライラック校舎」

「証言5」として、3人の回想を掲げましたが、空襲、間借り、五連隊へ移っての類焼などと、席の温まる間(ま)もないというか、学び舎が転々と変わった様子が読みとれます。加えて学制改革で女子高校になるとか、せつかくの浪打に「ライラック校舎」が完成、翌25年には県立高等女学校として記念すべき創立42周年を迎えましたが、翌月には男子高校との統合です。統合と言っても当初は一つの学び舎で男女の生徒が席を並べて勉学したのは、ごく一部でした。

このとき、第2代の校長としての今井孝氏は、「筒井の五連隊に、僅かに建ち始めた粗末なモルタル塗り校舎には旧中学校の諸君、薄暗い旧兵舎には新入の男女諸君。そして遙か離れた浪打のモルタル校舎には女学校系の皆さんが研鑽の毎日。統合とは名のみ、ついに一年間合同の学習をすることもなく卒業されたのが1回生」。さらに、「当時、私は一日おきに筒井と浪打とを駆けまわって職員とともに経営に努力した」と、「走馬燈」(1991)に稿を寄せています。

この記念誌(「走馬燈」)は昭和23年4月に新制高校1年生として入学、昭和26年3月に卒業した「青高二六会」の卒業40周年を期して刊行されたものですが、新制高校としては第3回卒業生、統合青森高校としては第1回生と卒業回期が定められています。「やぶなべ会」としては第3代となります。

なお、話が前後しますが、青高二六会の「走馬燈」に次いで青高二七会が卒業30周年記念で出版した「無限の青春」(1982)という統合第2回生記念誌があります。そのなかの回想座談会で大柳繁造さんが、「青中の入学は昭和21年4月14日、一中(のち一高、青北高)で、(その後)机も椅子もない松森分校で授業……。また佐藤功さんは、「一中の頃、講堂を区切ったような教室に各クラスが入り、生徒全員があぐらをかき、カバンを載せて授業、間もなく松森分校へ……」と述懐しています。



写真16 青中が入ったE棟の焼け跡(昭23年10月25日)



写真17 青高女が入った一部で、将校集会所。その池がのちの「三四郎池」

たて続けに火災発生～「五連隊兵舎校舎」

下の図9に旧五連隊の全体像を示しました。赤色の×印は火災で失われた兵舎です。G・H棟は早くから失われていたとされています(米軍の失火説もあり)。F棟の北側は青高女が入ったところで昭和22(1947)年9月23日に焼けています。E棟は青中が入った一部で昭和23年10月25日、夜中ですが秋の文化祭のときに出火し失われています。青高女のときは教員が殉死しています。

徳 差 私は燃えているのを見えています。焼死したということも聞いています。火事の跡から銃剣を見つけたりしました。

五十嵐(正俊) 青高女が入ったのは、将校が使ったところだと、チラッと聞きました。

室 谷 そうです。将校集会所(写真17)で、付属した池がのちの「三四郎池」です。

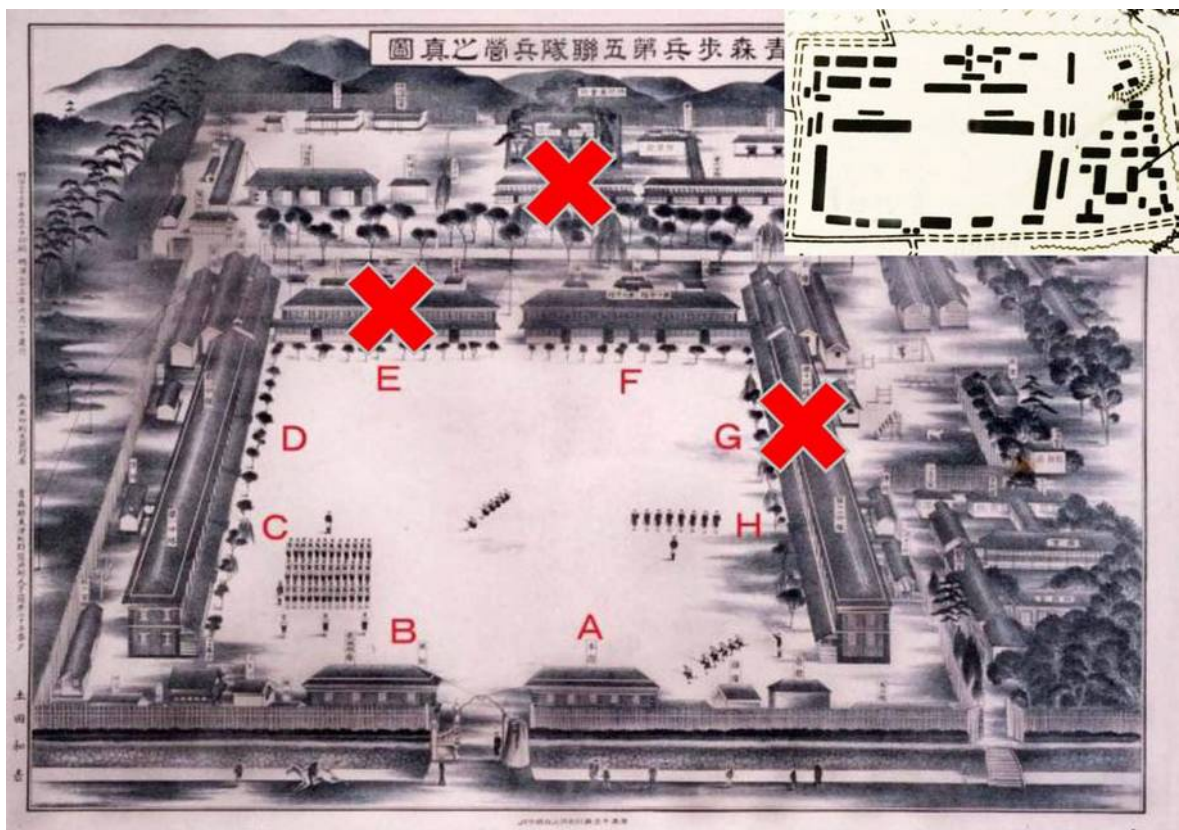


図9 五連隊の兵営全景。C,D,E(消失)棟が青中、上部が青高女が使用(のち消失)。(明33年作成絵図)。右上の図は米軍作成の空襲時期の五連隊配置図

青高、ついの安住の地 筒井に

いま冷静に考えても、年次関係など頭の中が混乱してしまうほど色々なことがありました。このようにして母校・青高は筒井桜川の地に、前身の青中の白堊の校舎のような白の「七棟校舎」を新築し、さらに2回の新築で現在に至っています。

これまでも青高関連で会報25号(2009)とか26号(2009)で紹介し、一部重複しますが懐かしい写真を見ていきたいと思います。

七棟校舎は一期工事が昭和24年に始まりました(写真15)。一番西側の第一棟(第一体育館)と第二棟が昭和25年に完成しました。この竣工前の前年11月から一部生徒が移り、全校としては兵舎校舎と両方を使ったことになります。

二期工事とか三期工事が続きましたが、予算の関係とか色々あって全七棟の完成は昭和29年1月です。

教職員・生徒ともに大変、苦勞されたことと思いますが、その先頭にたって采配をふるわれたのが今井孝初代校長です。八甲田山をバックに校庭に立っている写真(21)があります。現在はキャンパスの周りは建物で埋め尽くされて、八甲田山は校庭の東端から山の上部が見えるだけです。現校舎の3階の窓からは、校歌「無限の象徴」の歌詞にあるような風景が眺められるそうですが……。

当時の一連の写真を見て、皆さん、いかがでしょう。



写真21 今井孝 初代校長
(撮影:藤巻健二)



七棟校舎一期工事開始(昭24年6月頃)



第一期工事終了? (昭25年3月、浪打校舎から女子・移転完了とあり、この頃か)

写真18 七棟校舎の1期工事(昭24年4月、ほか)



昭29(1954)年頃。運動会の風景、左側に兵舎校舎Dが見える

写真19 昭29年頃の運動会。兵舎校舎D棟も見える。



まだ旧歩兵五連隊兵舎を利用していたが、建設中の新校舎と奇妙な調和が見られる

昭29年頃



白堊の新校舎、五連隊兵舎校舎が奇妙な調和。5代々代が混在の頃

写真20 同上。新旧校舎が奇妙なバランス見せる。

棟 方 (写真19について)左が兵舎の校舎、右が新築中の校舎です。真ん中の奥の平屋ですがここは教員住宅でした。

今井校長には思い出があるんです。兵舎の裏側にトイレがあって、ここで板切れなどを使ってフレームを作っていました。生物部ですから温室を作ろうと。校長がやってきました。何をやっている、と怒られたんです。事情を話したんですが聞き入れられません。私の卒業は昭和29年ですが、卒業式の日、校長に呼ばれました。何だろう!……。すると、校長が謝ったんです。あの

時は申し訳なかった、と。

室 谷 スゴイですね。怒ったが、しまったと言うことがずっと心の中にあったんですね。その時は建前上、怒らざるを得なかったんでしょうが。

写真22を見ると、真ん中の正面玄関のあたりから左側の校門に向かってサクラが植えられています。我々が入学した頃(昭和31年)にはあったもので、現在、最も勢力を誇っているサクラです。

下の写真24は完成した七棟校舎で、山道さんが保存していたカラー空撮です。東北初の50メートル公認プールがあるなどと、青高キャンパスは壮観でした。中央廊下が230メートルもある。

徳 差 構内からはずれて下に見える黒い所はウチの田圃です。3反6畝ありました。縁の方は畑です。

棟 方 プールの下の方に今井校長の校長住宅がありました。

五十嵐(正俊) 下の兵舎ですが、半分に切られている。そこに生物の部屋がありました。構内の周りは水路で、グルッと囲んでいました。



昭30(1955)年頃。
上の写真には、ソメイヨシノが
列状に校門から校舎に向けて
植えられている。これが現在の
校舎付近を彩る桜木である。

下は五連隊兵営の本部とされて
いたA棟で、この後しばらく
の間、クラブ活動の用具保管
庫などとして使われていた。

写真22 昭30年頃の七棟校舎。A棟も残っていた



写真23 その頃の運動会風景



昭36(1961)年頃の空撮。昭43年5月の十勝沖地震で甚大な被害、次代校舎に替わる。

写真24 昭36年頃の青高キャンパス全景。これから9年ほどで次の「鉄筋白壁」校舎に代わる

室 谷 七棟校舎の右側、三つの棟の上方で田圃と接しているところに立木がありますね。三四郎池の所です。

扇 野 私は昭和41年入学です。一番の右端が家庭科とか音楽室などがあり、それから2番目の棟に教室がありました。高2の時です。大地震、十勝沖地震です。怖かった。激しい揺れが終わってから廊下に出たら凄かった。ロッカーなど転んでしまっている。その上を歩いて階段のところに行きました。まだ薪ストーブで中庭には積んだ薪が散乱していました。割れてしまった棟もありました。

室 谷 確かに大地震でしたが、七棟校舎は戦後間もなくの建築ということで耐震から見るとどうだったのか。この後の推移は次のようです。扇野さんは七棟校舎の最後に学んだことになります。

昭和45(1970)年11月 新校舎(鉄筋白堊校舎)竣工記念式典、創立70周年、統合20周年
平成19(2007)年 現校舎落成記念式典

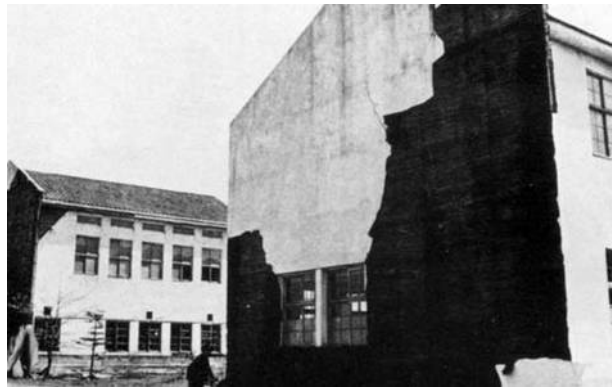


写真25 昭43年5月の十勝沖地震で甚大な被害



写真26(上) 「鉄筋白堊校舎」の空撮。校庭に校章と100の文字が。100周年記念の頃



写真27(左) 現在の校舎とキャンパス全景の空撮。ドームがあった教育センターとか50メートル公認プールは撤去された

114年の歴史、学び舎は九代、そして古樹は語る

青高9代校長の宮川隆英氏は「青高校舎九代略記」という一文を、私たち8回生の卒業50周年記念誌「無限の象徴」(2008)に寄稿してくれました。要するに校舎の変遷を見ると9代に相当するといふものです。これまでの整理の意味も含めて、関連部分を摘記します。

□ 初代「新町校舎」 明治33(1900)年、今の「青い森公園」の中央部に設置。当初、明治18年に青森県初の青森県中学校として新築されたが、同校は明治22年に弘前市に移転、その後青森県立第三中学校としてそれを増築。

□ 2代「落葉松校舎」 三中に遅れること7年、明治40年創立の第三高等女学校(後の県立青森高等女学校)が今の「青森市文化会館」の場所に設置、国道に沿ってカラマツの並木がシンボル。

□ 3代「白壁の校舎」 明治42年に三中は青森県立青森中学校に改称、同45年に合浦に移転、明治ルネサンス様式の格調高い白壁づくり。

□ 4代「松森校舎」 昭和20年の大空襲は、上記の青高ゆかりの3校舎を壊滅させた。青中、青高女は市内の焼け残った学校に間借りして授業を再開、青中は幸いにも海軍工員宿舎に入ることができた。地名からこのように呼ぶ。

□ 5代「五連隊兵営校舎」 昭和21年、五連隊をアメリカ軍が占拠していたが、ここがあいたことから青中、青高女ともここに入った。

□ 6代「ライラック校舎」 昭和22年、青高女が入っていた兵営校舎が焼失したことから、急遽、浪打に建設した。

□ 7代「七棟校舎」 昭和24年に始まった新校舎建築は25年、両校の統合校舎として29年に完成、230メートルの中央廊下に七棟を連ねた大校舎。



写真28 五連隊の正門、それが七棟校舎の校門に

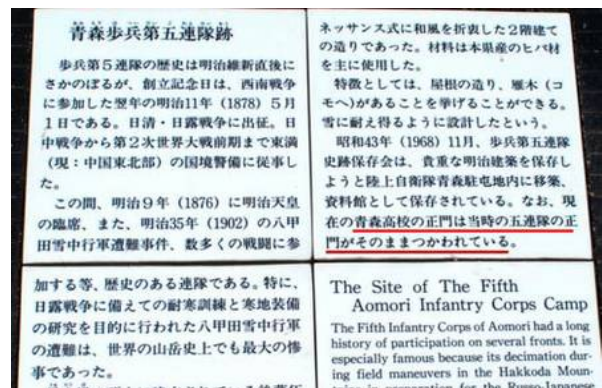


写真29 左記についての解説板が設置



写真30 現校舎(平19年4月撮影)



写真31 現存するケヤキ大木。1本は台風で倒れ、それを使った彫刻が残っている

□ 8代「鉄筋白堊」 昭和45(1970)年、創立70周年記念を期して初めて鉄筋コンクリート造りの校舎が完成。

□ 9代「現校舎」 平成19(2007)年竣工。創立100周年を期して、県内では他に類を見ないほど豪華な校舎が偉容を見せている。

青高114年の歴史のなかで、宮川氏はこのように9代として綴ってくれています。現在の9代目には「白堊」とか「落葉松」などの愛称はありませんが、やがてどなたかが味のある名前を付けて語り継がれていくことでしょう。

それにしても、人間が造ったものは寿命が短く空襲とか災害、あるいは老朽化でつぎつぎと消えていきます。何とはかないことでしょう。私は母校のわずか数百メートルのところに住んでいます。折りにふれて構内を歩き写真を撮っていますが、百年以上の物言わぬ語り部があちこちにあります。



写真32 「三中の松」。西門にあった頃(平20年撮影)。右上は「新町校舎」



写真33 「三中の松」は現在、正面校門を入ってすぐ右側に移されている(平26年撮影)

ただ今に残る人工物は、一つになってしまいました。五連隊の正門がそれで、そのまま青高の校門として引き継がれました(写真28と29)。7代と8代の校舎に通学したかたがたは、この門をくぐりました。9代になって、この門は文化財的に保存され、門としては使われていません。西寄りに新しい校門ができたのです。「五連隊・青高門」は、遺産として大切に未来につないで欲しいものです。

生き物好きの、“やぶなべ”風にはキャンパスを春夏秋冬、それぞれの姿で和ませてくれる古木が往時の語り部です。駐輪場のそばで天空に吠えるケヤキの大樹は数年前まで2本ありましたが、1本は台風で倒れ、その時の教頭先生が彫刻に仕上げ校長室に飾られています(写真31の右下)。現存の最後の1本は安全上だと思いますが、時々梢が伐られたりしましたが、程良いかたちで木陰をつくってくれています。これは優に百数十年の樹齢と考えられます(写真28)。シンジュの大木も構内に2本ありますが、これは五連隊時代に植えた場所ではないことから、子孫の実生が大きくなったものでしょう。この木は生長の早いことでよく知られています。



写真34 青高の歴史の象徴、樹齢100年以上のサクラ

サクラは五連隊時代から正門の周辺を飾っていました。キャンパスの整備で移植されたものもありますが、樹齢が百年を超してもなお美しい花を咲かせています(写真34)。同窓生などが記念植樹をするなどして、キャンパスは市内有数のサクラの名所です。

極めつけは「三中の松」として親しまれているクロマツでしょう。初代の「新町校舎」にあったものが、合浦の「白堊の校舎」に移されました。その後、現在地の筒井に「鉄筋白堊」校舎が建てられたとき、大変な苦勞をして合浦から現在地に運ばれました。しばらくの間、通用門の西門そばにありましたが(写真32)、最近、校門を入れてすぐの右側に移され、最高の見せ場に鎮座しています(写真33)。

「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」と言われますが、この「三中の松」は、じっとキャンパスに佇んで、青高の草創期から青高女との統合後も含めて、3万8000人余の若人の学ぶ姿、そして社会への門出を見守ってきました。いま青高は、「無限の可能性を追求、21世紀 人を育み 地域へ 世界へ」を校訓に、さらなる希望の歴史を刻み続けています。

謝 辞

本稿をまとめるに当たり多くの先輩諸氏にご教示をいただきました。また、写真家・藤巻健二氏、「青森まちかど歴史の庵 奏海」ならびに「青森空襲を記録する会」の今村 修・相馬信吉両氏からは貴重な写真資料を提供いただきました。心より感謝申し上げます。

参考文献

- 青森高等学校史編集委員会(1974) 青森県立青森高等学校史「無限」(通称「七十年史」)。
 青森高等学校八十年誌編集委員会(1980) 青森県立青森高等学校八十年誌(通称「八十年誌」)。
 青森高等学校百年史編纂委員会(2003) 青森高校百年史(通称「百年史」)。
 青高二七会(1982) 無限の青春 統合第二回生 卒業三十周年記念誌。
 青高二六会(1991) 走馬燈 青高二六会 卒業四十周年記念誌。
 青高8回生同期会(2008) 青高8回生卒業50年記念誌 無限の象徴。
 肴倉彌八(1976) 青森市町内盛衰記。
 青森空襲を記録する会(2002) 写真集(改訂版) 青森大空襲の記録。
 室谷洋司(2000) 目で見える青高キャンパス周辺の環境変遷、やぶなべ会報 第25号。
 編集部(2012) 岩崎ミエ先生訪問記、やぶなべ会報 第35号。
 五十嵐正俊(2012) 5回校舎の変わった3代目、やぶなべ会報 第35号。

お 願 い

青高校舎代々で、4代に位置づけされている「松森校舎」について不明のことが多々あります。所在地が現在のどこに当たるのか、写真などが現存するのか……。些細なことでもご教示いただければ幸いです。